

そのジャンル 「夏石番矢」

『夏石番矢自選百句』（沖積舎、二〇一五年五月一九日刊、ISBN978-4-8060-1684-7 2500 円＋税）

Koji YAMADA
山田 耕司



夏石番矢がみずから
句を書として仕上げた。
その作品、百点。「あとが
き」の言葉を借りれば、「初
期句集『うなる川』から
二〇一二年刊の『ブラッ
クカード』まで」の「筆
で書きやすく、まがまが
しくない内容の百句」を

自選したとのこと。しかもこれは「句集四十一年間を総括し、来たるべき還暦を予祝する儀式」という性質を持つそうだ。まことに勝手ながら、夏石番矢は歳をとらないような妙な先入観があり、還暦と聞いて驚いた次第。それに付けても「四十一年」にわたり常に夏石番矢がゆるぎなく夏石番矢である続けていること、これ、なのめならず。そもそも最も風当たりが強い強そうな位置に立ち続けて、という条件についての活動である。まあ、現在の俳句状況からの冷遇やら誤解やらは、「風当たり」のうちに入らないと夏石番矢は涼しい顔で言い放つて

あるうけれど。何はともあれ、おめひついでいります。
さて、書作品について。

現代において私たちが目にすることができる書作品にはいくつかの傾向がある。まずは「古典一派。茶席の掛物として禅僧が為す文字等をイメージするのが判りやすいだろうか。墨色も濃く、かすれもすくない。いかに書家の個性を示すかというよりは、いかに古典的な様式を再現しているか、という世界。俳句で言えば、先師の教えや歳時記的な約束事の成就をこそ、作品制作の動機とし相互評価とする世界に近いだろう。夏石の作品は、ここには存在しない。規範とする枠組みを再現するような書の運びではない。俳句においては、古典に通じ先行作品を解剖してはきただろうが、夏石番矢とは「先人のコピー」とは最も遠いタイプの作家であることは、ここに紙幅を費やすまでもなく明らかだ。

次は「芸術」派。正確に記せば、「芸術志向」派。大きな特徴としては、たいいてい「読めない」。あくまで意味世界から遠ざかり、筆遣いや墨色等の視覚的要素を以てこそ、作品の価値とする。それが仮名文字であるうが漢字の条幅作品であるうが、意味の世界を副次的なところに後退させ、絵画的な方向へと傾倒しはじめたら、それが「芸術志向」派。夏石の書は、実はここにも属さない。おおむね、なぜ「読めない」文字は、書こうとするのか。言葉の情報性が強くなるにつけ「有用性」のようなものが発生することで、「目的なき合目的性」を芸術の要素とするような近代以降の芸術感においての価値が目減りする、とでもいうのだろうか。

俳句においては、古典に通じているかどうかを自ら確認することも無く（古典派でありつづけるのはそれなりにタイヘン）、それなりに古典的な言葉や約束をちりばめながらそれなりに不思議な感覚を作品化する傾向がある。俳句とは、実に

便利で、同時に、実にヤツカイ。予備知識がたいして無からうとも、それなりな「芸術」っぽい表現ができてしまふのだ。そしてさらに、それを相互に「芸術」であると評価し合うコミュニティを「世界」と思い込んでしまふしが俳句的環境には存在する。古典派が堅い他律に従うのに対して、こちらは自分の都合の良いヤワラかでフニヤツとした他律を自らにまかなう。これは「芸術志向」というよりは、「クラフト（手づくり工芸）」派のようなものだろうけれど（すみません、手づくりの工芸全部を否定してるわけじゃありませんからね）、問題は、その他律のフニヤフニヤ具合にあるのではなく、「情報（有用性）からちよつと離れるぐらいで表現活動が成立しちゃう」という姿勢にある。なぜ多くの俳人たちがいまだにこのやわらかい他律から離れられないかと言えば、そこに魅力があるからというよりは、脱・情報あるいは脱・有用性としての言葉の有効な着地点を他に見出していないからなのではないだろうか。夏石の作品は、この手のゆるい他律との葛藤を排除しようという行為の累積であろうし、なにより「詩」という着地点を見定めたものであることを忘れるべきではないだろう。世界の俳句作家との交流も、エスニズムの拡大やらゆるい他律によるコミュニティー作りが目的ではない。そこには「詩」として見あらわされる普遍的な鉱脈が潜んでいる可能性がある。かつ、翻訳という「情報の有用性はおおむね伝えうるも文化内での共有イメージなどのニュアンスの移行が難しいプロセス」に作品を晒すことで濾しとられる「詩」の顔つきも期待される（本書「作品目録」には、全作品に英語訳がほどこされている）。こうした「詩」の発見は、その容易なことではない。しかしながら、その用意ならざる道においてこそ、夏石番矢の句業というものは評価されるべきなのであろう（俳壇的な評価に、そんな基準はないですね）。

書に話を戻そう。「古典」派、「芸術志向」派、以外は、たいてい「個性」派。ヘタウマを佳しとし、作家の「お人柄」や「生き方」が重視される価値観。夏石の書にはヘタウマのあざとさのようなものもない。還暦の記念というけれど「人生の貫禄」のようなものを以て味わうには、文字が跳ね回りすぎている。「個性」派……。俳句への引き写しは必要ないだろう。そういう作者は、枚挙にいとまない。そして、夏石はいうまでもなくここにも属さない。

私が夏石番矢の書作品から最も多く感じ取るのは、「時間」である。筆にまかせて書き上げるイキオイの、そのかすれ。そこには、紙に向かいあう身体所作の時間が込められている（いかなる他律的な体裁をも気にしていないような筆さばきは、書き直しをしない覚悟。ここに夏石の不可逆なる時間への思考や、既（墨いろ）から未（余白）へのワタシ（私／渡し）の関係性を読み取ることも、番矢作品になじんだ者ならば可能かもしれない）。それもさることながら、書いている身体の動きよりも、作品をイメージする思考の方が、より速く動いている。その「身体と思考のズレ」を時間として作品の上に見るのだ。そして、身体と思考のズレを瞬間として記し留める行為においてこそ、夏石番矢の句作と書とは交差し、シンクロしているように思えてならないのである。

はてさて。では、彼の書はどういうカテゴリーに整理したらよいのか、と思案してはたまらなくて感じたのだけれど、夏石番矢とは、俳句作家としてはまさしくどのようなカテゴリーにも属さないのである。世代であれ、時代であれ、特定の集合にとりこまれることが無い。あえて言えば「夏石番矢」というジャンルなのだろう。それを読者に気付かせることこそが、「還暦を予祝する儀式」としての本書の最もきわだった役割なのではないだろうか。